



定住外国人のよみかき研究プロジェクト

2026 年度シンポジウム

みんなで考える
定住外国人の日本語よみかき実践
—当事者のエピソードを手がかりに—

予稿集

2026 年 9 月 27 日(日) 10:30～16:30

会場:早稲田大学 早稲田キャンパス 7 号館 207 教室

主催

国立国語研究所 共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」

後援

公益財団法人 愛知県国際交流協会
公益財団法人 茨城県国際交流協会
公益財団法人 浜松国際交流協会
一般財団法人 自治体国際化協会

◆プログラム◆

9:45 開場・受付開始

10:30-10:45 開会のあいさつ・全体趣旨説明 福永由佳（国立国語研究所）

午前の部 10:45-12:25 エピソードが語る定住外国人の日本語よみかき実践

10:45-10:50 午前の部：趣旨説明 福永由佳（国立国語研究所）

10:50-11:15 話題提供1「定住外国人のよみかき実践におけるテクノロジー活用」
高民定（千葉大学）

11:15-11:40 話題提供2「人的ネットワークを活用する定住外国人のよみかき実践」
福村真紀子（茨城大学）

11:40-12:05 話題提供3「町内会の回覧板から考える定住外国人の社会参加」
福永由佳（国立国語研究所）

12:05-12:25 話題提供4「定住外国人のよみかき研究 エピソード集のご紹介」
神美妃（早稲田大学大学院）

=====12:25-13:55 昼休憩=====

午後の部 13:55-16:30 実践と研究の“あわい（間）”

13:55-14:00 午後の部：趣旨説明 福永由佳（国立国語研究所）

14:00-14:50 座談会「実践と研究の“あわい（間）”はあるのか？」
安田乙世（日本語教育支援グループことのは）
加藤雅春（茨城県国際交流協会）
杉山美紀（愛知県国際交流協会）
*モデレーター：池上摩希子（早稲田大学）

14:50-16:20 ディスカッション

「実践と研究の“あわい（間）”を超えて、定住外国人の日本語よみかき実践をともに考える」
*ファシリテーター：福永由佳（国立国語研究所）

16:20-16:30 総括・閉会のあいさつ 福永由佳（国立国語研究所）

2026 年度シンポジウム 開催趣旨

国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」では、外国人生活者の日本語による「よみかき実践」に着目し、生活の中で営まれる多様な読み書きの実態を、現場に根ざした調査・分析を通して明らかにしてきました。また、研究者と実践者が継続的に対話を重ね、ともに学び合いながら研究を進めてきたことも、本プロジェクトの大きな特徴です。

しかし、日本語教育に関する研究成果は、必ずしも現場で十分に共有・活用されているとはいえず、研究と実践のあいだには依然として“あわい（間）”が存在しています。その背景には、研究成果が専門的で現場との接点が見えにくいことに加え、実践者が研究に参加したり、研究成果に触れたりする機会が限られていることなどがあると考えられます。

本シンポジウムでは、プロジェクトの成果として作成した「定住外国人のよみかき実践エピソード集」を紹介するとともに、調査を通して見えてきた外国人生活者のよみかき実践の姿を共有します。その上で、外国人生活者のよみかき実践という共通の課題を手がかりとして、研究に参加することで実践者が得た気づきや、実践者との対話を通して研究者が得た学びを共有します。そして、研究者と実践者が立場の違いを越えて、研究と実践の「あわい（間）」をともに省察し、両者をつなぐ新たな協働の可能性を探ります。

お問い合わせ先

国立国語研究所 共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」事務局

E-mail: tagengo0317@gmail.com

国立国語研究所 共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」

日本には、留学生とは違い、学校などで本格的に日本語を学ぶ機会が少ないまま生活している外国人の方が多く暮らしています。それにもかかわらず、行政手続きや仕事、子どもの学校関係、地域の情報など、日常生活のさまざまな場面で日本語の読み書きが求められています。

しかし、こうした「生活者としての外国人」（定住外国人）が日常の中でどのように読み書きを行っているのかについては、これまで十分に研究が進んでおらず、支援の取り組みも海外に比べて遅れていると指摘されています。

国立国語研究所の共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究（略称：生活者識字）」（2022～2027年度）では、長く日本で暮らす定住外国人の方々を対象に、日常生活の中でどのように日本語の読み書きをしているのか、その実態を調査し明らかにすることに取り組んでいます。

本研究では、新識字研究（New Literacy Studies）を理論的な基盤とし、読み書きを「生活の中で行われる社会的実践」として捉えています。そして、調査で得られた知見をもとに、読み書きの学習・教育をめぐる課題を明らかにし、よりよい外国人支援につなげていくことを目指しています。

プロジェクトウェブサイト

<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/index.html>



プロジェクトリーダー：福永由佳（国立国語研究所研究系 教授）

https://researchmap.jp/FUKUNAGA_Yuka

E-mail : ynonami@ninjal.ac.jp



定住外国人のよみかき研究プロジェクト 研究組織

福永由佳（国立国語研究所）	角知行
池上摩希子（早稲田大学）	高畑幸（静岡県立大学）
上原龍彦（にほんごスペース つなぎめ）	パイチャゼ・スヴェトラナ（北海道大学）
加藤雅春（茨城県国際国際交流協会）	福村真紀子（茨城大学）
高民定（千葉大学）	松本美香子（早稲田大学）
神美妃（早稲田大学大学院）	八木真奈美（東京女子大学）
杉山美紀（愛知県国際国際交流協会）	安田乙世（日本語教育支援グループことのは）

■これまで開催した研究集会・シンポジウム

- 2022 年 3 月 12 日：「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム(早稲田大学)
「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へ ―中国・サハリン帰国者の事例から―」
- 2023 年 8 月 26 日： 2023 年度研究集会（北海道大学）
「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活―よみかき実践を中心に―」
- 2024 年 9 月 7 日： 2024 年度研究集会（オンライン）
「エスニックコミュニティと日本語のよみかき―茨城県の多文化共生を支えるキーパーソンの語りから―」
- 2025 年 11 月 29 日： 2025 年度研究集会（愛知県三の丸庁舎）
「よみかきの多様性を考える―さまざまな手段と支援のかたち―」

国立国語研究所



日本語を見つめ続けて 70 年以上

国立国語研究所（国語研、NINJAL）は、1948年に設立された、日本語を科学的に研究する国の機関です。戦後のことばの実態を明らかにする取り組みから始まり、70年以上にわたり、日本語の語彙、文法、方言、外国人対象の日本語教育など、ことばの多様な側面を調査・研究してきました。

最近では、話し言葉や書き言葉の大規模データ（コーパス）を収集・分析し、日本語がどのように使われ、どのように変化しているのかを客観的に示しています。また、日本全国の方言記録や地域言語の調査も進め、失われつつあることばの姿を未来へ伝える活動にも力を入れています。

さらに、外国語として日本語を学ぶ人々を支える基礎的な研究、教材開発、研修を行い、国内外の日本語教育の発展に貢献してきました。

国語研のもう一つの大きな特徴が、大学や研究機関との共同研究です。国内外の研究者と協力し、専門性を持ち寄ることによって研究をより広く、深く進めています。共同研究の成果は、公開シンポジウムや講演会、オンライン資料として発信され、社会が自由に利用できる資源として提供されています。

今回のシンポジウムは、国語研の共同研究プロジェクトの一つである「定住外国人のよみかき研究」の活動の一環です。

■国立国語研究所のご紹介

<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/>



■所在

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

■共同研究プロジェクト一覧

<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/>



◆注意事項◆

- *申し込み時にいただいた個人情報は、個人情報保護ポリシーに則り厳正に取り扱います。
- *発表タイトルは変更される可能性がありますので予めご了承下さい。
- *話題提供や座談会、ディスカッションの間は、携帯電話をマナーモードにさせていただく等、音の出ない配慮をお願いします。
- *話題提供や座談会の間は、静粛をお願いします。私語は厳に慎んでください。また、質疑応答の時間を別途設けますので、登壇者による発言の途中での発言や質問はご遠慮ください。
- *広報等の目的のため写真撮影をいたします。もし、撮影についてご了承いただけない場合、お近くの係員までお声がけください。
- *参加者の皆様による写真・動画の撮影、録音はご遠慮ください。
- *話題提供や座談会中は原則、飲食禁止ですが、水分補給のための飲み物は適宜取っていただいて結構です。
- *ごみのお持ち帰りにご協力ください。
- *予稿集の最後のページにアンケート用の QR コードがあります。アンケートにご協力ください。
- *その他係員の指示に従い、進行の妨げとならないようお願いします。

◇昼食・休憩場所等のご案内

- *大学敷地内の食堂やコンビニは日曜休業のため、ご利用いただけません。
「橙子猫- Orange Cat-」(4 号館)、「Uni.Shop & Cafe 125」は日曜も営業しています。そのほか、キャンパス周辺にある飲食店やコンビニのご利用をご検討ください。
- *会場内でのご飲食につきましては、当日の指示に従ってください。

エピソードが語る定住外国人の日本語よみかき実践

定住外国人の日本語よみかきは、日々の生活の中で、さまざまな人や道具、言語資源を活用しながら実践されています。午前の部では、調査で得られた当事者の具体的なエピソードを手がかりに、テクノロジーの活用、人とのつながり、地域社会への参加といった側面から、その実態と可能性について考えます。エピソードを通して、定住外国人のよみかき実践の多様性と豊かさを共有し、ことばと社会との関わりについて考える手がかりとします。

定住外国人のよみかき実践におけるテクノロジー活用

定住外国人のなかには、一人暮らしであったり、ホスト社会や同国人コミュニティとのつながりが限られていたりするため、日本語での読み書きに際して周囲に助けを求めにくい環境で生活している人も少なくありません。本発表では、こうした人々がどのように読み書きを行い、困難に対処しているのかを、言語生活調査およびインターアクション・インタビュー調査の結果に基づいて考察します。調査からは、対象者が周囲の助けを借りず、テクノロジーを活用しながら主体的に「よみかき実践」を行っていることが明らかになりました。こうした実践は、日本語能力の高低にかかわらず、定住外国人にとっての日常的なインターアクションそのものです。

一方、テクノロジーの利用自体に大きな問題は見られないものの、実践に先立つコミュニケーションや社会文化的知識が必要となるなど、その周辺にはなお課題が存在します。地域社会や支援者には、定住外国人の「自律的に行動したい」という欲求を認識し、その主体的な実践を積極的に評価し、受け入れる姿勢が求められます。

^{こう} ^{みんじょん} 高 民定（千葉大学/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

自身も定住外国人としての背景をもつ立場から、これまで日本における外国人の言語使用意識や言語問題を、当事者の「言語管理」の視点から研究し、社会参加を支える「よみかき実践」にも着目してきました。近年は、自主夜間中学でのボランティア活動をきっかけに、外国人住民が自ら支援の担い手となる活動や社会参加へ関心を広げています。現在は、そうした場における新たな「よみかき実践」を、当事者の視点から捉え直す研究に取り組んでいます。

人的ネットワークを活用する定住外国人のよみかき実践

本話題提供では、定住外国人が人的ネットワークを活用してよみかき実践を行っている事例を紹介します。

地域における日本語教育の役割の一つは、「定住外国人に日本語を読むこと・書くことを教えることである」という認識が多くの人びとにあるのではないのでしょうか。しかし、本当に定住外国人は、日本語の「読み書き」の教育を求めているのでしょうか。彼ら／彼女らは、日本の社会に何を求めているのかという問いを立て、日本に移住した二組の定住外国人夫婦に言語生活調査へのご協力をいただき、インタビューを通して考察しました。

その結果、日本語の読み書き能力が十分でなくても、居住地域の隣人、職場の同僚、日本語が操れる家族という人的ネットワークを拠り所として「よみかき実践」を行っていること、また、助けられる立場のみならず隣人を助ける立場にあることが定住外国人に自己肯定感をもたらすことが把握できました。ここから、明示的で体系的な日本語教育よりも先に、共生社会に貢献するチャンスを得ることこそが、彼ら／彼女らが日本の社会に求めることだと考えました。

ふくむら まき こ

福村真紀子（茨城大学/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

滋賀県大津市出身。茨城大学で日本語教育に従事しています。専門は地域日本語教育。2010年に「多文化ひろば あいあい」（東京都日野市）、2025年に「多文化ひろば★うみ」（茨城県日立市）を立ち上げました。「状況に埋め込まれたことばの学び」をめざし、「日本語にこだわらない日本語教育」の実践に取り組んでいます。

町内会の回覧板から考える定住外国人の社会参加

町内会は、地域住民が自主的に運営する組織として、防災、防犯、環境整備などを通して地域の安全・安心な暮らしを支えています。その活動を支える情報共有の手段の一つが「回覧板」です。しかし、回覧板の多くは日本語で作成されており、日本語を母語としない外国人住民にとっては内容の理解が難しい場合があることが報告されています。

本発表では、20 年以上日本で暮らしている外国人自営業者の事例を取り上げます。彼は回覧板の情報を理解するために近隣の日本人住民の支援を受けてきましたが、その過程で地域住民との関係を築き、地域活動にも関わるようになりました。本発表では、この変化を「社会参加」の観点から捉え、外国人住民と地域コミュニティとの関わりについて考察します。また、回覧板をめぐるよみかき実践が、情報理解にとどまらず、地域社会への参加を促す契機となる可能性についても考えます。

ふくなが ゆ か
福永由佳

（国立国語研究所・総合研究大学院大学/定住外国人のよみかき研究プロジェクトリーダー）

石川県金沢市生まれ。日本語教育を専門とし、国内外のさまざまな教育現場で日本語指導に携わってきました。1998 年から国立国語研究所で、日本語教師の研修や調査研究に従事しています。現在は、定住外国人のよみかき研究のほかに、日本社会の言語的多様性についても研究しています。近著『ことばと公共性—言語教育からことばの活動へ』（共著、明石書店、2024）、『言語政策研究への案内』（共著、くろしお出版 2024）など。

定住外国人のよみかき研究 エピソード集のご紹介

定住外国人のよみかき研究プロジェクトでは、2026年3月27日よりウェブサイトで「定住外国人のよみかき研究 エピソード集（試験公開版）」を公開しています。本エピソード集は、定住外国人の方々を調査協力者としたインタビューのデータを整理し、よみかき実践に関わる箇所を「エピソード」として公開したものです。2026年9月時点で25のエピソードが閲覧でき、今後も追加していく予定です。

定住外国人のよみかき研究 エピソード集（試験公開版）



<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/data.html>

各エピソードは、インタビュー形式と一人語り形式という異なる2つの形式で公開しています。インタビュー形式は、インタビューを文字起こししたデータに忠実な形です。調査者と調査協力者のやり取りをほぼそのままの形でまとめました。一人語り形式は、インタビュー形式をもとに、語り手自身の視点から体験や思考を連続的に語る「一人語り」の形に再構成したものです。いずれの形も、調査協力者の声をそのまま伝えることを重視し、補足は最小限に留めています。

005_インタビュー形式



<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/data/interview/005.html>

005_一人語り形式



<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/data/narrative/005.html>

本話題提供では、実際に公開されているエピソードを提示しながら、エピソード集公開の意義や期待する活用方法を紹介します。

じん みき

神 美妃（早稲田大学大学院生/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

青森県出身。早稲田大学日本語教育研究科博士後期課程で、外国人住民が日常生活で行っている読み書きの実践について、同行調査などの方法で研究しています。2013年から日本語講師として民間の日本語学校で日本語教育に携わり、2025年より武蔵野美術大学非常勤講師、国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員。

実践と研究の“あわい（間）”

研究が現場へのラブレターであるならば、実践はその返書である——。午後の部では私たちが感じた実践と研究の「あわい」とは何かを見つめ、その「あわい」を超えて、定住外国人の日本語よみかき実践をともに考えます。午前の部で話された、研究者から実践者への「ラブレター」ともいえる研究の問いや知見に、実践者が現場の経験をもって応えます。そうした対話を重ねながら、それぞれの立場を往還し、新たな実践と研究の可能性を協働で探ります。

実践と研究の“あわい（間）”はあるのか？

私たちにとって実践と研究の「あわい」とは何だったのか？研究に関わった実践現場の三者が集まり、それぞれの経験に引き寄せながら多角的に振り返ります。本研究の成果であるエピソードを現場でどう生かすかをはじめ、研究者との協働の中で生まれた小さな気づきを自由に語り合い、共有し、現場と研究をつなぐ可能性をひらく時間とします。

*登壇者

やすだおとよ

安田乙世（日本語教育支援グループことのは/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

1988年より日本語教師。生活者の日本語教育を実践の場とし、学校・地域・企業で日本語を母語としない人たちの学びと生活を支えてきました。省察を継続しながら『日本語教育を軸とした支援活動の実践』に多方向から取り組んでいます。中国帰国者自立支援通訳兼自立指導員、NPO法人おおさかこども多文化センター理事等も歴任し、現在は日本語教育支援グループことのは副理事長。

かとうまさはる

加藤雅春（茨城県国際交流協会/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

（公財）茨城県国際交流協会交流推進課長、（一財）自治体国際化協会認定多文化共生マネージャー。茨城県水戸市出身。JICA青年海外協力隊への参加をきっかけにJICAや大学院（国際協力研究科）で勤務。国際協力で実践と研究の両方を経験。その後、出身地に戻り国際交流を推進する公的機関での仕事に従事、現在に至ります。

すぎやま みき

杉山美紀（愛知県国際交流協会/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

1992年に（公財）愛知県国際交流協会に入職。主に、外国人相談や日本語教室のボランティアの育成、外国人児童生徒の学習支援をはじめ、多文化共生の地域づくりに関する事業に従事してきました。現在は、交流共生課長兼相談課長。

*モデレーター

いけがみ まきこ

池上摩希子（早稲田大学/定住外国人のよみかき研究共同研究員）

石川県金沢市出身。中国帰国者定着促進センター教務課日本語講師を経て、2005年早稲田大学大学院日本語教育研究科准教授、2010年現職。専門は日本語教育学。「人がことばを学ぶ意味」について考え続け、院生を対象に「日本語教育の専門性をもった〇〇」を育成中。

*ファシリテーター：福永由佳（国立国語研究所）

実践と研究の“あわい（間）”を超えて、 定住外国人の日本語よみかき実践をともに考える

研究者の想いは、現場に届いているだろうか。実践者は、その想いをどう受け止め、どう返すのか。話題提供を起点に、定住外国人の日本語よみかき実践をめぐる対話を通して、実践と研究がともに歩む未来を描きます。

◆ディスカッションの流れ

14:50-14:55 趣旨説明

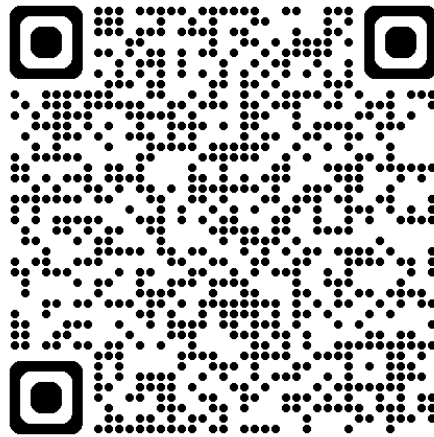
14:55-15:30 フロアの参加者同士によるディスカッション

15:30-15:50 ディスカッション内容の共有

15:50-16:20 登壇者によるディスカッション

MEMO

アンケートのお願い



本シンポジウムへのご意見、ご感想をお寄せください。

＼書籍化のお知らせ／

本日の座談会の内容も含め、本プロジェクトの研究成果をまとめた書籍の出版が決まりました。多数の豊富なよみかき実践のエピソードに、調査協力者とかかわりのある共同研究員による解説を加えて、みなさまにお届けします。ぜひ続報をお待ちください。



『エピソードでたどる定住外国人のよみかき』(仮)

発行所:株式会社ココ出版

◆2027 年夏頃 発売予定◆

定住外国人のよみかき研究プロジェクト 2026 年度シンポジウム 予稿集

発行日：2026 年 9 月 27 日

編集：共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」事務局

福永由佳 神美妃

発行者：共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2 国立国語研究所

